

のぞいてごらん

小野市市民安全部ヒューマンライフグループ



オレンジ色のあたたかな光が照らす、どこにでもあるようなお家^{うち}に、お母さん・お父さん・姉のエリカ・弟のタクヤの4人の家族がいました。

「まったく、子どものしつけもできないのか！」

「あら、わたしのせいだっていうの!？」

お父さんとお母さんは、ちょっとしたことでよくケンカをします。

「やめて、けんかしないで！」

エリカとタクヤは、悲しくなって言いました。

「ケンカじゃない。話をしているだけだよ」

ことばはおだやかでしたが、お父さんは、怒^{おこ}った顔で言いました。

お母さんも、ため息をつきながら2人に言います。

「あなたたちがケンカばかりしているからよ」

エリカとタクヤは、顔を見合わせました。



2人は、今日もケンカをしてしまいました。

「あーん。あーん。痛いよお！」

タクヤが大声で泣いていたら、お父さんが部屋に飛びこんできてどなりました。

「またケンカかっ」

「おねえちゃんがつき飛ばした！わあ～ん」

タクヤは、泣きながらお父さんに言いました。

「タクヤが1時間っていう約束を守らなかったの…それに…！」

エリカは、泣きたい気持ちをこらえて言いました。

お父さんは、どちらの話もきこうとせず、

「言い訳するんじゃない!! 先に手を出したエリカが悪い！」

エリカは、おねえちゃんなんだから、もっと我慢しなさい」

怖い顔でエリカをにらみました。

（言い訳じゃないわ…約束を破られて腹が立った。それから…）

エリカの伝えたい気持ちは、声になりませんでした。

そして声にならなかった思いは、静かに涙にかわりました。

ごくん。

エリカは、その涙をこっそり飲みこみました。



「泣きやめ！」

お父さんは、今度はタクヤにむかって言いました。

タクヤは、ギュッと奥歯をかみしめ、これ以上涙がこぼれないように両手を強くにぎってみましたが、涙はとまりませんでした。

「ダメなやつだなあ。そんなに泣き虫なら、強い男になれないぞ」

(ぼくはダメな子なの？泣いちゃいけないの…?)

タクヤも声に出しては、言えませんでした。

言えばお父さんは、きっとがっかりする…そんな気がしたのです。

ごくん。

タクヤも思いを飲みこみました。

すると、タクヤのお腹がチクチクと痛みだしました。

(…あれ?)

「もうケンカするんじゃないぞ。いいな？分かったな!？」

お父さんの言葉に、2人は、うなずきました。

でも、仲直りをしたいとは、少しも思いませんでした。





「まったく、こんなふうになるのはあなたたちのせいだわ。
同じクラスのカオルちゃんなんて、弟の^{めんどう}面倒をよくみているわよ」
お母さんは、悲しそうな顔で言いました。

エリカは、その^{ことば}言葉に^{おどろ}驚きました。
(わたしのせいなの？なんでカオルちゃんと比べるの…?)

タクヤも、
(どうせ、ぼくは悪い子なんだ…)
お父さんとお母さんの^{ことば}言葉が、2人の頭の中でグルグル回ります。

エリカが布団に入っても、まぶたの裏でカオルちゃんが笑っています。
(どうして、カオルちゃんのことばかり考えてしまうんだろう)

寝返りをうつばかりで眠れません。

怒ったお父さんと悲しい顔のお母さんが迫ってきます。

エリカは、とてもイライラしてきました。

するとカオルちゃんの顔が、とてもいじわるな顔に見えてきました。

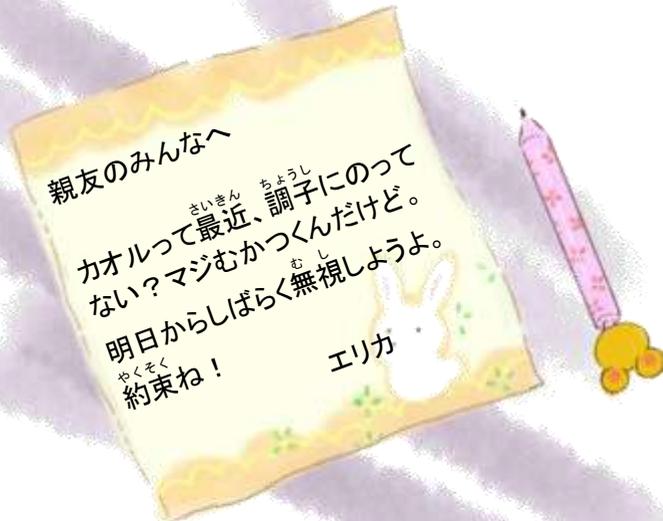
(カオルちゃんって、イヤな子。あんな子、いなくなればいいのに。)

「……。」

エリカは、布団から起き上がって、机の中にしまっていたお気に入りの
便箋を取り出しました。

「…できた」

手紙を書き上げたら、少しすっきりして、エリカは、眠ることができました。



次の日の朝。

「弱虫にお腹^{なご}をかじられる夢^{ゆめ}をみたんだ…」

タクヤは、お腹^{なご}をさすりながら、お母さんに言いました。

「つまらないこと言っていないで、早くしなさい。」

お母さんは、取り合ってくれません。

「あ、お父さん…」

「今日 いそぐんだ」

お父さんは、忙しそうに出て行ってしまいました。

どちらにも話をきいてもらえないままに、タクヤは、家をでました。

タクヤが曲がり角を曲がると、赤い屋根の家から同じクラスのケンイチが出てきました。

「ケンイチく…」

けれど、ケンイチは、お父さんと楽しそうに笑^{わら}いながら歩き出しました。

(うらやましいな…)

タクヤは、それ以上^{いじょう}声をかけずに、とぼとぼ歩きだしました。



次の曲がり角で、1年生のユウタと会いました。

「あ、おにいちゃん！」

ユウタは、うれしそうに声をかけてきました。

でも、タクヤは、その笑顔がなんだか気に食わないと感じました。

「おい、チビ！新しいソフト買ってもらったって言ってたよな。

明日持ってこいよ、絶対に！」

タクヤは、背の小さなユウタに向かって言いました。

「えええーっ、どうしてそんなこと言うの？」

ユウタは、いつもと違う感じのタクヤが怖いと感じました。

「うるさい！明日持ってこなかったら、これから遊んでやらないからな」

ユウタは、半分泣きベそをかきながら、うなずきました。



自分の言うことをきくユウタを見ると、タクヤは、自分が少しだけ強くなった気がしました。

チクン

(あれ？どうして？)

タクヤの胸のあたりからチクンと音がします。

朝のエリカの教室は、みんなが友だちと好きなテレビの話や本の話をしていて、とてもにぎやかです。

ガラリ、戸が開いて、カオルが元気に教室へ入ってきました。

「おはよー！」

「……………」

誰も返事をしません。

「あれ？エリカいないの…？あ、エリカ」

カオルは、首をかしげながら、いつも通りにエリカのところへ近づきます。

「あっちへ行こう」

エリカは、カオルを無視して、友だちと教室をでました。

ぽつんと教室に残されたカオルは、不安そうな表情でエリカを目で追いました。

その表情を見ていると、エリカは、胸がすっとしました。

「ねえ、クラスみんなにも、カオルを無視しようって、手紙回そうか？」

「ふふふ、そうじゃあ？」

みんなは、エリカの言うことに、クスクス笑ってうなずきました。



カオルなんて、お母さんが言うような「良い子」なんかじゃないんだと、強く思いました。

チクン

(あれ？どうして？)

エリカの胸のあたりからチクンと音がします。

昼休み、エリカは、カオル以外の友だちとトイレに行きました。
手を洗っている時、何気なく見たトイレの鏡に、おかしな物が映っています。
エリカの周りにだけ黒い雲のようなものが巻きついています。
「なに、これ…？」

手でさわっても何も感じません。友だちも何も言ってきました。
朝から鳴っていた、チクンという胸の音もどんどん大きくなってきました。
心配になったエリカは、保健室へ行ってみようと思いました。

保健室の入口の前でタクヤとばったり会いました。

「おねえちゃん…」

「タクヤ…どうして？」

チクン、チクン、音は鳴りやみません。

2人は、保健室の戸をあけて中に入りました。

目の前に全身を映す大きな鏡がありました。

その時です。

「君たち、どうしてそんなに悲しそうなんじゃ…」

「鏡がしゃべった！」

タクヤは、びっくりして座りこみました。

「誰なの？私は悲しくなんてないわ。友だちだってたくさんいるもん！」

エリカは、タクヤを支えながら、鏡に向かっていいました。

「ぼ、ぼくだって、弱虫じゃない！」

「そうかなあ？もっと、よお～くわたしを見てごらんよ」

鏡は、2人に話しかけます。

2人は、おそろおそろ、鏡をのぞきこみました。



すると、そこには、不安^{ふあん}そうな顔でふるえている青い顔をした2人が
映^{うつ}っていました。

その上、2人の胸^{むね}のあたりには、トゲが刺^ささっています。

チクン、チクン、チクン、

どうやらこのトゲから、音がしていたようです。

しかも、トゲの音は、だんだんと大きくなってきました。

それにつれて、少しずつ胸^{むね}やお腹^{なか}に刺^さすような痛^{いた}みが伝^{つた}わってきます。

「…これが私^{わたし}? 違うわっ」

「こんなの、いやだよ!」

痛^{いた}そうな自分たちを見ているのがあまりにもつらくて、2人は、目をおおい
ました。



「よく見るんじゃ。これが本当の君たちの姿^{すがた}じゃよ。そのトゲは君たちの心の声じゃ」

「心の声？」

エリカは、目をそむけたままつぶやきました。

「君たちは、言葉^{ことば}にできなかった気持ちをたくさん飲み込んだんじゃな。そんな気持ちは、心の声となって、外に出たくて暴^{あば}れるのじゃ。心の声を持った子どもは、心の声とたたかって、へとへとになってしまうのじゃ」

かがみ鏡^{かがみ}の声は2人の心に、そーっとしみこんでいきました。

(心の声ってなんだろう?)

エリカは、その正体をたしかめたくて、鏡^{かがみ}をのぞきこみました。

しかし、突然^{とつぜん}

「うううーっ！」

タクヤがとなりでうずくまりました。



「痛いよお！」

「しっかりして！」

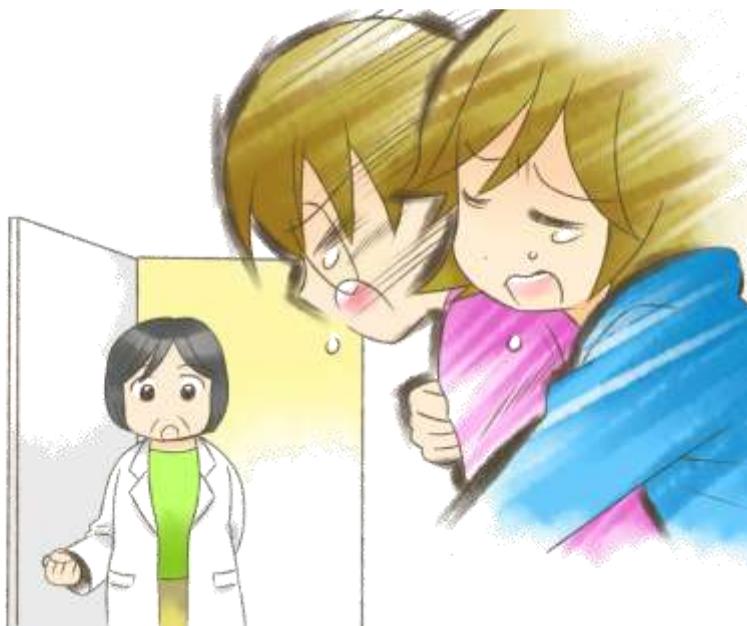
エリカは、どうすることもできずに、タクヤの体を抱えます。

「だれかたすけて！」

エリカは、自分の痛みも忘れて、タクヤのために声をあげました。

「どうしたの？」

保健室のえみこ先生が、入り口の戸をあけてかけよって来ました。



「お腹が痛いよーっ。胸が痛いよーっ！とげが刺さってるんだ…!!」

タクヤは、顔をゆがめて苦しんでいます。

「まあ、苦しそうね。痛いのはこの辺かしら？」

えみこ先生がそうと両手をタクヤのお腹に当てました。

「あら、この硬いものはなに？」

「心の声よ。鏡がそう言ったの」

エリカは、先ほど起こった不思議な声と鏡の話をえみこ先生に話しました。

「そう、そんなことがあったのね」

「その飲み込んでしまった心の声を、わたしに聞かせてくれないかしら？」

えみこ先生のその言葉は、タクヤの心の中にすーっと吸い込まれていきました。
すると、お腹の中が少しだけあたたかくなってきました。

タクヤは、少しだけ楽になり、自然と言葉がでてきました。

「ぼくはダメな子なんだ。男なのに泣いてしまうんだ。強くならなきゃいけないのに」

タクヤは、唇をかんで、涙をこらえます。

「男の子だって悲しいときには泣くわよ」

えみこ先生は、お腹に手を当てたままそっと言いました。

「トゲが刺さって、痛かったね」



「…ケンイチがうらやましかった」

「…強くなりたかった」

「…ユウタに^{めいれい}命令したら、強くなった気がしたんだ」

ぽつり、ぽつりと心の声は、^{ことば}言葉となってでてきます。

ぽろぽろと、^{なみだ}涙がこぼれます。

タクヤは、^{なみだ}涙をぬぐおうとせず、話し続けました。

^{かがみ}鏡に映っているタクヤに^さ刺さったトゲは、少しずつ^{なみだ}涙とともに流れていきました。

^{かがみ}鏡の中の流れていくトゲを、エリカは、じっと見つめました。





(心の声は、ためていてはいけないんだ…)

(思いは言葉にして伝えないと…)

エリカは、自分に言い聞かせるように、ひとつ^{しんこきゅう}深呼吸しました。

「えみこ先生、私の心の声もきいてもらえますか？」

「あなたも心の声を持っているのね。いいわよ、一緒^{いっしょ}に考えましょう」

えみこ先生は、にっこり笑ってこたえました。

エリカは、ポケットに^{しの}忍ばせていた2^{つう}通目の手紙を、静かに^{しず}握りしめました。

タクヤは、決心したように、1年生の教室に向かいました。

「お母さん、きいてほしいことがあるの」

家に帰ったエリカは、ドキドキしながら言いました。

エリカのいつもとは違う^{ちが}表情^{ひょうじょう}を見たお母さんは、夕食のしたくの手を止めて話をきいてくれました。

「つらかったのね。気づいてあげられなくてごめんね」

エリカは、ポケットの中の手紙をやぶってゴミ箱^すに捨てました。



あとがき

世の中には、いじめられてもしょうがない子なんて、一人もいません。
また、だれかをいじめるために生まれてきた子も一人もいません。
みんなこの世の中でたった一人だけのかげがえのない大切な存在（そんざい）なのです。

小中学生のみなさんに「気持ち」の調査（ちゆうさ）をしました。
その結果「人をいじめたいと思ったことがある」と答えた人が小学生で10人に4人、中学生で10人に2人いました。いじめたくなる原因（げんいん）は、いろいろでした。でも、ほとんどの子が、イライラ、くやしい、はらがたつ、かなしい、しんどいといったその時の気持ちをだれにも話していないときに「いじめたくなった」ということがわかりました。

気持ちをきちんと聴いてもらえた時、心があたたかくなって、自分やまわりの人を大切にする新しいパワーがわいてくるのです。

あなたの気持ちをきちんと聴いてくれるおとなの人に話してみましよう。
いじめをやめる勇気（ゆうき）や、いじめに立ち向かう力（ちから）が自分の心の中にあるということを感じることができるようでしょう。



おとなのひとへ

「一番かなしいことは、だれにも気持ちをわかってもらえないとき」と言った子どもがいました。

子どもたちは、おとなに自分のことを見てほしい、自分の話を聴いてほしい、気持ちをわかってほしいと願っています。

心をこめて聴けるおとなが一人でも増えていくことが子どもを安心させ、いじめをなくしていくことになります。おとなは、子どものその願いにこたえなければなりません。



子どものまわりのおとなが、
子どもの揺れ動く複雑な気持ちを
「聴く」ということが
暴力防止の最も効果的な方法です

「聴く」ことは
あなたから子どもへの
最大のプレゼントです



相談してください

子育てや、いじめ、自尊感情などについて
心配なことがあれば、一人で悩まず相談してください
・ONOHまわりほっとライン… 62-4110
・小野市女性のための相談… 63-8250

制作・発行■ 小野市市民安全部 ヒューマンライフグループ
〒675-1380 兵庫県小野市王子町806-1
TEL: 0794-63-4311
イラスト■さらえきみ 発行日■ 2012年3月